

おあとが宜しいようで

岩 崎 孝

うそ、といえば、普通は嘘を連想します。当然のことながら嘘とは眞実でないこと、嘘つきは泥棒のはじまり、などと大いに忌嫌われた言葉です。だから例えば英語で、You are a liarとか、That is a lie などといわれたり、言ったりした場合は、相手との縁が切れるのを覚悟しなくてはならなくなるわけです。

とはいうものの、嘘から出た眞実^{まこと}や、嘘も方便など、随分と重宝に嘘は使われていますし、あのウインストン・チャーチルなどは、眞面目に嘘^{うそ}をつくのが大政治家である、と嘘を巧みに持ち上げております。しかし何といても万人が認める最大の嘘は、「私は嘘をつかない」を置いてほかに無いようです。

いい加減なこと、大袈裟なこと言うのを「うそぶく」といいますが、これは元来、口笛の意の嘘（口をつぼめて息を強く吹く）に由来するのだそうで、口を尖らせて発言を強調し、正当化する様子を、この「うそぶく」は良く表わしております。ともあれ、嘘と嘘（く）は、同義語とみなしてよいでしょう。

1994年の到来は、21世紀への門戸を益々近づけることになりました。しかし1993年度を振り返ってみますと、実に多くの、いい加減と嘘に基づくハプニングがあったと思います。直接の引金は、例の異常気象といわれている平成版米騒動も元はといえば、おかしな圧力団体に対して減反^{たん}などといういつわりの政策によって、その場を糊塗してきた付けが廻ってきた気がします。当初の目的をすでに失っ

たにも拘らず、建設を更に強力に進めている長良川河口堰にしても、「朕は国家なり」の旧内務省の伝統を踏襲する嘘きに帰するところであり、自民政権の崩壊は、チャーチルのいう大政治家が、そこにいなかったから、とは、少し言い過ぎでしょうか。

皇后さんの音声失調症(?)を、眞実を伝える責任の重みを忘れた一部マスコミの大袈裟さが原因、といわれております。何とも締らぬ年でありました。

さてそこへいくと、嘘をつかないのが時間と年令。ただ過ぎに過ぎるもの、(中略)人の齢、(後略)と枕草子にあるように、人の停年は確実にやって参ります。山崎豊彦教授を、3月をもってお送りいたしました。京都大学から貝島炭鉱(閉山。福岡県)を経て、当時の鉱山学科へお迎えして四十有余年。炭(石炭)から油(石油)へ、広い学問領域で活躍された事を知る人は多いと思います。心からご苦労様と歓送の意を表させていただきます。それにつけても、私の会長任期中に、大塚教授に続いて、お二人の先生の停年に立会うことになろうとは、これもすべて時のなせるいたずらと、いうところでしょうか。

山崎淳司^{あつし}助教授の方は、この4月10日をもって、Well-off unattached young manに終止符をうつ予定です。教育学部・堤貞夫教授(旧鉱山学科出身)のご盡力によるとか。嘘いつわりのないところは、直接ご両人にお確かめください。

次は少々変わったニュース。理工学部キャン

パスが、「禁煙キャンパス宣言」を行ったこと。愛煙家ならずとも、近頃の嫌煙権拡大傾向には少々首をかしげたくなる面もあり、一部同情申しあげますが、要するにこの宣言は、指定された灰皿のある場所以外での喫煙をしないことをアピールしたものです。つまり喫煙は灰皿のあるところで、という、よく考えれば、常識への回帰にはかなりません。ただ宣言をするに至った直接の動機には、少々考えさせられる側面があるようです。

昨年完成した新棟55号館、ここにある会議室等の常時使用しないスペースは、学生の休憩・談話室として解放しておりました。ところが煙草の吸い差しを床に捨て、足でもみ消すという習性の学生が多いために、床に敷かれた絨毯は焼けこげだらけになり、修復に多大の経費が掛ったこと、といわれております。2月15日、新学生ラウンジが51号館2階隣設部分に完成、これに伴い解放は凍結されると共に、禁煙区域に指定されました。また宣言の広告日を敢て4月2日としたのは、1日にすることによって、April foolと受け止められないためという、学部長室の遠慮(?)からとか。いずれにしてもワセダは変わりました。

いわゆるバブル時代には、合格は二の次で有名校と称する学校をとにかく受験し、満足感に浸る、名誉受験なる言葉が生まれた事をすでにご存知の向きもあると思います。その名誉受験者を含む受験人口の減少、地方回帰指向が高まった、などの原因もあって、早稲田大学受験者総数は昨年よりも10%強、理工学部では8%強、それぞれ減少しました。資源工学科第一志望の場合は、実に34%の減でした。昨年の一志合格最低点が14学年中の上位にあったことが、資源組し難しの印象を受験生に与えたからでしょう。

受験生の私学指向が鈍化したのは、すでに限界と思われる私学の学費問題もさることながら、特に大学院大学を指向する国立校への国の優先的助成と、それに伴う国立校の総合

的充実という事実を、見逃すことができません。広い国有地に、国の金がふんだんに注ぎ込まれば、良い施設や設備が十分に整うはずで、学費と善意に基く民間からの寄附が主体の私学経営では、所詮、太刀打ちできぬところでは。

一方、いま旧帝国大学を中心に、大学院大学構想が盛んに打出されております。しかしこの構想は、質・量ともに従来にも増した設備とスタッフがなければ達成できぬこと明らかです。私学に果してそれは可能でしょうか。

国庫の大幅助成を期待する向きもあります。ワセダと何処々々は別、などは単なる希望的観に過ぎません。国立と同じ行き方をするのではなく、実践的知識と技術を身につけた、「使える」若人を世に送り出すという、ワセダ本来の姿に徹するべき、と愚考いたします。なおこの点につき、卒業生各位のご意見が伺えれば幸甚です。

最後になりましたが、資源工学会奨学金制度が発足し、第一号給付生が6月に採用されることになりました。この制度は、故海老原安太郎氏(昭和22年卒)ご遺族のご厚志と、会員各位からのご厚意とを合せ、400万円を基金としたものであります。金利が下がった昨今のことゆえ、給付額は年間10万円程度にしかありませんが、さきの吉沢奨学金に次ぐものとして実施に漕ぎつきましたことは、まことに同慶のいたりであります。大いにその実を図る所存です。

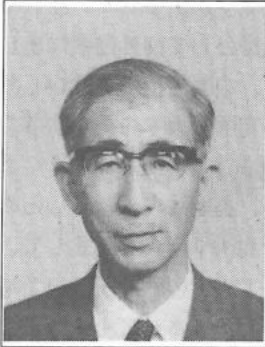
さて私の会長任期は、この9月をもって終了いたします。次期会長は順序からいえば在原典男教授ですが、ご在職期間を考慮して名古屋俊士教授に、主任・会長を2年間引き継いでいただくことになりました。

いま資源工学科のスタッフ若返りは、着々と進んでおります。

「雪散るやおどけも言えぬ信濃空」(一茶)

伝統と刷新

山崎豊彦



山崎豊彦
(やまざきとよひこ)

大正12年6月20日、佐賀市生れ。昭和22年9月京都帝国大学鉱山科卒業、昭和26年早稲田大学理工学部助手、講師、助教を経て昭和40年教授、この間昭和34年工学博士、昭和39年在外研究員としてカルフォルニア大学石油工学科客員教授、学内公職：資源工学科主任、理工学研究所管理委員、早稲田大学商議員。学外活動：都立大学及び国鉄中央鉄道学園工学講師、通産省炭層調査、地下ガス化、保安新技術委員、石油公団石油開発技術センター各種委員、日本学術振興会委員、日本学術会議資源開発研究連絡委員。石油技術協会副会長、理事、評議員。各種部会委員及委員長。石油学会理事、顧問、各種委員及び委員長。受賞：石油技術協会賞、石油学会賞。中華人民共和国大慶石油学院名誉教授。

私が早稲田大学の門を叩いたのは昭和25年度少し前だったと記憶しています。金属工学科長谷川先生の御紹介で、学生時代読ませていただいた坑気調整学の中野先生にお会い致しましたが、先生は早速私を教室の長老の先生方と若手の先生に紹介していただきました。長老の先生は米澤先生、藤井先生、若手の先生は田中先生でした。幸い田中先生は丁度自然発火の研究をされていて学位論文を準備されていたようです。私は卒業後大之浦炭鉱で自然発火の現場も見ってきましたので、田中先生のお誘いで、この研究をすることになりました。しかし昭和25年は一般教育の手伝いなどもあり、鉱山学科では昭和26年から助手として奉職し、早速石炭の熱伝導率測定その他卒業研究のお手伝いを致しました。

当時は実験装置が殆んどなく、手近にあるコニカルピーカーにゴム栓をし、これに水銀U字管を取り付け、温湯をバーナーで調節しながら60℃を保って見ました処、意外に簡単に減圧してゆくことが読み取れました。これ

は石炭が空気中の酸素を吸収してゆく為であることは明らかですので、すぐ次の段階として本格的に石炭の低温時（室温以上ですが）の酸化現象を、この方法で測定することに決めました。当時日本では石炭の酸化をこのような方法で測定した文献はなく、また坑内自然発火研究を対象にした論文は見られませんでした。（外国の研究では石炭の酸素吸収など文献は古くから有ります）従って当時は大へん難しい研究をするものだなあ、と言われたものです。この研究で判るように、石炭、特に炭鉱現場を対象にした研究では石炭は生き物であるということでした。又化学系でこれらの研究発表をする場合、すぐ試料の取扱いが問題になります。筆者らもこれに答える可く対処する為、出来るだけおおきな塊の石炭を湿分を充分含ませた、おが屑にくるみ、採掘切羽から送っていただくよう、太平洋炭鉱(株)に協力を依頼致しました。当時太平洋炭鉱は乙種炭鉱でガスの少ない炭鉱に属していましたが、坑道先端の引立でガス爆発を起こ

して問題になっていました。私共は送られてきた塊炭を2cm角ぐらいに小割し、酸化防止のため飽和食塩水で満たしたガラス瓶に入れて、空気を遮断するため、ガラス瓶中に空気が残らないようにして、ガラス刷合せの栓をして保存して置くことにしました。しかし翌朝研究室に来ますと、その瓶は割れてしまっていました。この原因は石炭中に吸蔵されていた化石ガスによるものと判断し、以後これを炭層ガスの研究に展開して行きました。石炭の自然発火の研究、炭層ガスの成因、そして日本各地炭田のガス包蔵量調査を目標にした炭層ガスの賦存とその特徴について日本全国の炭鉱を廻って測定しました。この過程で面白かったことは炭層ガス中に C_2 、 C_3 の炭化水素ガスが含まれていたことです。当時ガス分析は爆発法などにより、水素とメタンの可燃性ガスを分析していました。又炭鉱現場では100%メタンガス干渉計を利用して、ガス濃度を調べていました。私共が自然発火の研究で赤平炭鉱に行きました際、係長がガス濃度は100%を越えると言うのです。勿論干渉計を使っただけの話ですが、そこでその理由を説明してあげるといって、東京に帰り、メカを訪問して尋ねたところ、それは干渉縞を一つスキップしたのでせう、と言う答でした。スキップと言うのは読み飛ばすことだそうです。しかしこれでは答になりません。当時東京大学総合試験所に質量分析計が導入されたことを知り、ガスを採取し質量分析計で調べた結果、 C_2 、 C_3 等ハイヤーな炭化水素が入っていることが判明して、赤平炭鉱に報告して上げました。その後かつて私共の石炭乾留ガス分析結果の報告を送って上げました北大広田鋼蔵先生（物理）も自作の質量分析計で炭層ガスの分析をされ、殆んど私共と同じ報告をされています。私共のこの時代はエネルギーの構造変化と呼ばれ、石炭から石油へと移行する時代でした。当時石油の価格は石炭がカロリー当り1円であったのに対し、その半分ぐ

らいに下がり、石炭7000円に対し、当カロリー4000円、3500円といった値段で入ると言われていました。これでは夫々のメリットを評価したとしても競争になりません。炭鉱の閉山は相次ぎ、若い研究者達もその対策を話し合ったことが有りました。何といても採鉱科出身の我々では手が出ません。私は幸い、大学から在外研究員として海外出張に出してもらうことになり、中野先生にお願いして、石油開発関係の研究所や大学を見学することにしました。中野先生は私をBNIに行くよう勧められましたが、長期滞在は難しいとのことと1週間程度研究所や現場を見まして、その後カルフォルニア大学の石油工学科で半年間、客員教授として滞在させてもらうことになりました。海外での見学や研究は後の石油工学研究では大へん役に立ち、またその間に知り合った先生や卒業生との親交も今では私にとって大切な心の宿となっていることを覚えます。石油工学の研究に入り、現在に至るまで30年近くなりますが、この間澤山の石油技術者が、石油公団をはじめ石油開発及び関連諸会社に入社され、これより以前石油会社に入社された方、又他学科の卒業生を加え、毎年石油開発技術者OB会が開かれ、運営されています。最近では海外で働くOBも多く、北海、中東、東南アジア、中国、オーストラリア、カナダ、米国と各地で勤務しておられます。この方面の仕事は大へん厳しい自然条件下にあります。資源工学では大へん大きなウェイトを持つと思いますので、今後この方面に進出しようとする学生諸君を含め、高らかにエールを送りたいと思います。また私が、石油工学に進む以前また進んでからも、様々な方面で活躍しておられますが、これらの方々はずでに数多くの困難を克服してこられていると思います。同窓関係者も少ない職場ですから、より厳しいものがあると思います。しかし何時でも諸先生や諸先輩、そして他科学部の方の応援も得られていると思います

ので、その方面の方々にも同様なエールを送りたいと思います。最後になりましたが教室の諸先生方、特にお若い先生方、資源工学科は過去採鉱・冶金、鉱山時代を通して現在に至りました。そしてその骨格は余り変わっていないはずですが、将来に対する目標に厳しさがあるだろうと想像します。しかし余り現

在に固執せず、過去の伝統の中に刷新を計ることで、将来の展望は開かれると思います。新しい科学や方法論は常に我々が希望する方向に新天地を開いてくれるものと確信していますので、新しい卒業生を期待される社会に送りだして下さい。最後に、教室の諸先生方の御活躍を祈って筆を擱きます。

山崎先生の思い出

亀谷 眞

私が大学に入ったのは、終戦直後の事でした。大学は未だ焼跡が生々しく残っていたものでした。勿論冷暖房があるわけではなく、冬はオーバーを着たまゝ授業を受けていました。食事も外食券を必要とし、中々ありつけないので、殆んどが辨当持ちでした。天気の良い日には、大隈庭園の芝生の上にあぐらをかき食べるか又は、新宿まで歩いて行き、映画館の2階席の一番前に陣取って、辨当をつかった事が未だに頭に残っています。

昭和24/25年頃は、石炭は黒ダイヤと言われ増産に増産が重ねられ、昭和26年には、朝鮮戦争が勃発、更にそれに拍車をかけたものでした。山崎教授との出会いは、田中研究室で卒業論文を手掛ける事になった時からだと記憶しています。当時先生はまだ助手をされていたと思いましたが、たしかあれは昭和26年の夏だったと思います夏休みに田中先生のお伴で、山崎さん、宮部、小林両先輩と九州の貝島炭鉱に行き、田中先生の研究をお手伝いとして、炭壁温度の測定を行なった事がありました。当時は、前にも述べた様に、炭鉱景気にわいており、又先生と御一緒だった事もあって、貝島炭鉱のクラブに宿泊させて頂き、連夜大宴会が催され、約一週間の滞在で

したが、飲めや歌えやの大さわぎをした事を覚えております。何れにしても、帰りには、東京からの往復の旅費と日当を頂き、持って行ったお金が増えて帰って来たものでした。その帰りには、先生に別府を奢って貰った事を覚えております。

山崎先生に一番お世話になったのは、卒論の発表の日の事でした。私のテーマは、石炭のガス吸着機能と云うものでした。約1年間の成果の発表で、居並ぶ教授方の前で発表するので、可成りの緊張をおぼえました。

教授達の意地の悪い質問に対して、先生の助言を頂き、何とか無事発表を終る事が出来感謝感激したものでした。

何れにしても、私達の学生時代は、物のない時代でしたが、先生方の暖かい御指導により無事卒業する事が出来ました。卒業してから42年、先生も停年退職されると云う日を迎え歳月の立つのが早い事を痛感しております。その他にも色々なエピソード、失敗談や思い出は数限りなくありますが、この辺で筆を置きます。拙文お許し下さい。尚最後に先生の益々の御活躍と御健康をお祈り申し上げます。

(昭和27年卒 MCC ジャパン)

「山崎研」との深いつながり

鎮守次郎

山崎先生との深いつながりが生まれたのはやはり私が帝国石油に入社してからである。私は大塚研究室で「黄鉄鉱の酸化特性」を卒論のテーマにこれまた井上研究室に移り研究していましたが大杉先生の地質学、伏見先生の試錐工学についてはことのほか興味を持っていました。そうした関係で上記の帝国石油にお世話になり昭和39年に頸城鉱業所（当時）で先生と再会したのが懐かしい対面として記憶されてならない。先生は当時のエネルギー動向を早くから予測され石油開発方面に目をつけられ、今までの石炭の地下ガス化の技術を石油の油層工学分野に応用され、特に日本ではまだ着目していなかった地下深部の油層、ガス層の高温、高圧下におけるPorosity, Permeabilityに研究をうちこまれました。先生はその成果を石油技術協会報や石油学会誌に多くの論文を発表され学界・業界から高く評価され、いよいよ早大資源工学科に新たに石油開発部門への基礎をつくり着々と確実に作りあげてこられました。私もその後帝国石油のアブダビ、ナイジェリア、マレーシア、インドネシアの4ヶ国での石油開発活動にたずさわる機会を得ましたが、休暇や帰国の度に先生にお会いし外国の国情や技術情報をお話し、そのほとんどが先生の教室の方々にも

同時に、お話や映像をお伝えできたのも先生のお力ぞえがあったからこそと思っています。ある時は教だんにも数回立ち学生とのスキップに少しでも役立ってくれたものと今は思っています。今、心のうちを言いますとこれは私の企業活動以外の主要な行事であったともいえます。幸いなことに当社は国内に油田、ガス田を数ヶ所保有しそれがそれぞれ特徴ある油田型態、管理型態であり、先生の教室の方々の実習舞台に大いになり得たことが幸いました。勿論石油資源開発（株）もその他のエネルギー企業同様ですが、我々古かぶは企業のこうした舞台を持つことに依り真に役立つ技術者の養成に一役かうことになりましたが、それは企業の多くの先輩の我々に残した遺産であり、我々は今後の国内油田の発展に一層の努力をせねばならないと責任を感じています。日本のエネルギー構造の中で石油エネルギー時代は化学原料問題を含めてまだまだ30～40年以上を続くとはいふものの地球環境問題も重要課題であり地熱エネルギーをも含めた地下流体鉱物の物性挙動について幅広い研究に新しい在原研究室に大いに期待したいところである。

（昭和34年卒、帝石削井工業）

山崎先生とパブリカと悪童

松岡徹

昭和33年に入学した当時はまだ日本の鉱山もそこそこの業績を誇っており、私自身遠縁に当たる人から鉱山に行けば、課長クラスでボーナスは横に立ち、部長になれば縦に立つ

から（当時は給料は現金が入っていた）、本当に良いところに入社したと言われた。

その時の学級担任が山崎先生であった。いかにも国立の先生といった感じで、ご専門も

石油でそれまで鉱山科では教えていなかった分野を研究された先生とのふれこみであった。講義はたんたんとして余り冗談も言われず学問一筋の真面目さが目立ったように記憶している。あれからもう30年余が立ち、一昨年には卒業30周年の同窓会を開催したが、今でも先生は昔と同じく、皆の話をにこにここと聞いておられたのが印象的であった。我々37年組は幸いにして三井、池田など名幹事に恵まれ今でも一声かければ20人は集まるというクラスであるが、これも山崎先生の人徳の現れであろう。

もう30年以上前のことではっきりとした年は記憶にないが昭和34年か35年であったろうか、村川、田中と共に浦和に在った竹村宅に遊びにいったことがあった。丁度新婚ほやほやであった山崎先生も喜多見のご自宅から奥様とおいでになったが、何と当時自家用車を国民に広く販売しようとしてトヨタがその名前を一般公開して売出した、かのパブリカで乗りつけられたのであった。今でこそマイカーは珍しくも何ともないが当時は大変な贅沢品であり庶民には手の届くような代物ではなかった。先に着いていた我々はもの珍しげに車をなで回したりシートに座ったりトランクを開けたりしていたが、1週間ほど前に運

転免許を取った村川をけしかけ先生に車を借りて近所を一周してくる了解を取った。当時は道路もすいており、ましてや浦和の閑静な住宅地であったから先生も気安く貸して下さったのだろうと思うが、奥様はご心配されていたように思う。さてドライブに出発と言うことで、運転は村川、竹村がナビゲーター、田中と私は後部座席に乗って出発した。今考えるとかなり大胆なことをやったと思うが約20分ほど近所を回りすぐ近くに帰ってきたが最後の交差点で後部車輪を脱輪し窪地に落ちてしまった。悪戦苦闘約30分の後、ようやく脱出に成功し竹村宅に戻ったが、竹村のご両親や先生夫妻はかなり心配されていたようで、どうした何かあったのかと問い質された。悪童一同は、余りに快適だったのでちょっと遠くまで行っていたとごまかしたが、どうも奥様は何かを感じておられたようだった。たまたま今回先生について何か書いてほしいとの依頼を受けちょうど良い機会に恵まれ、また、もう時効と思うのでこの辺で白状した方が良さそうだと思いここにその真相を述べることとした次第。

先生、奥様本当に申し訳ありませんでした。

(昭和37年卒)

山崎豊彦先生と卒論研究の思い出

高橋一彦

山崎豊彦先生が本年めでたく古稀をお迎えになり定年ご退職されるとのこと。卒業後27年目となってしまった今でも卒研の頃の、当然ながら当時40代前半の先生のイメージがそのまま（すなわち昔はお若いながらも“貫祿”があって…表現が非常に難しいのですが…しかしその後はいつまでもお歳を感じさせてくれないので）、このお知らせには本当に歳月の過ぎ行く様が早いことを感じさせてく

れました。

昔を振り返ってみますと、何と云っても山崎先生にお世話を頂いた最大の大事事のご多分に漏れず卒論研究で、なんと「石油の性状と脱硫研究」という大胆不敵なテーマに取り組んでしまったことであります。学生時代なんて真にのんびりしたもので、テーマを決めてから、さあどうしようか？といつまで経ってもスタートが切れず、顔で笑って心で怒っ

ておられた“忍の一字”の先生を思い出します。幸い他の5人のすこぶる良きグループメンバーに恵まれて、かつ先生の何気ない、しかし脱線気味の学生のペースを把握された絶妙なコントロールのお蔭で全員無事（特に私を）卒業まで導いて戴いた御苦労に大変感謝致しております。今では、おそらく臭くて黒くて汚い原油を加熱分解するなんてそれこそ“公害”騒ぎが生じて現・大久保の新キャンパスであつたら追い出されてしまうところでしょうが、その点、昔の研究室は気兼ねが要らず良かったかも知れません。また、実験設備が永年使用していなかったものもあってすぐには機能せず、先ずその整備から始めなければ先に進まなかったりしたのですが、それがまた自ずから設備の機構を良く理解するのに役立っていた訳で、その後のトラブル発生にも何ら困ること無くすみました。麻雀以外に二晩の徹夜など考えられなかったのに猛烈に連夜の実験に頑張ったり…、想い返せば色々と蘇って来るものです。そして、2～3日の休みがあれば、それを更に自主延長して山に登りに行ってしまい、早稲田祭やその他主要行事をエスケープの連続であつた私とか、バイト優先、果ては宴会優先、デート優先なんて輩もいた中で目出度く4年間で証書を頂戴して早稲田をあとにできたことも、重ね重

ね先生のご指導とグループメンバーの暖かいご協力の賜と感謝申し上げる次第です。

卒業後殆どのメンバーは、遠からず卒論テーマに関連して石油関係へ進みましたが、私は少々脱線し、山崎研の二人の先輩がいたこともあって（どうも気楽な道を選んでしまったようで）日本坩堝^{ルツボ}に入り金属溶解炉用耐火物の技術・開発・製造を手掛け今日に至っております。従って、鉄、アルミ、銅などとは非常に縁が深くなり石油とは無縁となりました。一方、耐火物を焼成する窯の燃料である重油の我が卒論テーマそのものであつた“硫黄分”の公害に気配りしなければならぬという皮肉な巡り合わせに苦笑しております。

いつであつたが、先生の奥様のご実家（岐阜）への道中に当社愛知県の工場へ立寄って戴いたことがありましたが、東名高速を「ずっと80キロぐらいで走ってきたけれど、他の車はみんな抜いていったヨ」と、いかにも山崎先生らしいマイペースのハンドルさばきに感心し、納得したものです。最後になりましたが、山崎先生ご夫妻の末永いご健康とお幸せをお祈り致します。また、今後とも引き続きご指導を賜りたくお願い申し上げます。

（昭和42年卒 日本坩堝）
（1967）

“石油鉱業への道”

南 和 雄

先ずはじめに、この度山崎先生がめでたく古稀を迎えられたことを心からお喜びしたいと同時に、定年となられ退職されるにあたり、私自身が石油鉱業の道で何とかやって行ける素地をつくって頂いた先生に心から感謝申し上げたいと思います。

私が早稲田に入学した時は、学費値上げ反対闘争の真っ直中で、約30年前のことですか

ら先生が40才の頃であつたと思います。諸先生方の中でも一番若々しく良き兄貴分のような存在だった印象があります。授業では石油工学概論を受け持っておられ、その講義の都度先生ご自身で作られた4～5枚の教材で教えて頂いた記憶があります。その授業を興味を持って受講して行く中に、何となく石油鉱業の道に進もうという気持ちにさせて頂いく

“きっかけ”になりました。先般その山崎先生の最終講義を、どうしても仕事の都合で拝聴出来なかったのは非常に心残りに思っております。

当時を振り返って見ますと、時代の流れだったかも知れませんが、山崎先生の研究室は花形で10人前後入室したかと思えます。私もその一員で石油鉱業への道を目指して当然の如く先生の研究室の門を叩きました。卒論はダルシーの法則の検証とかいったテーマで、貯留岩（疑似）の浸透率を実測してみることでした。先生のご指導のもと沢地君（アラ石）、前波君（石資源）と3人グループの共同卒論となりましたが、その実験装置もいろいろと工夫して手づくりで製作し、当時の学生としてはそれなりの成果があったように記憶しております。この時の貯留岩の試料採取には先生を含めて4人で、ある時は先生自ら自家用車を運転して頂き、よく江ノ島、那須・・・etcと行ったものです。孔隙率等この検証に必要な測定も、帝石の技研に何度かお世話になりました。3年の時の実習では、先生の御尽力で会社と先輩を紹介して頂き、石油資源の見附鉱場、東新潟の試験場さらには第1白竜による試掘場で大変貴重な経験をさせて頂きました。この頃のことが石油鉱業への一歩を踏み出した一番の思い出として、今でも鮮明に脳裏に焼きついております。

楽しい思い出もありまして、夏休みには山

崎研の旅行で伊豆の戸田に行ったことがありましたが、黒いスイミングキャップを被り潜水も難無くやられる姿を見て、先生の運動神経に少々疑問を抱いていた私にとって、あれ程水泳が上手であったとはその時まで全然知りませんでした。磐城沖石開に出向っていた一昨年でしたか、先生が学生を帯同して実習旁ご訪問され、プラットフォームを案内したことがありました。その前夜は、私も久し振りに学生時代を思い出して先生と学生達を交えて飲食を共にし、勢いをつけての二次会では何処で覚えられたのか先生のカラオケまでも聞かせて頂きました。またゴルフも少々なされるとのことで、その時お約束した小名浜でのゴルフのお誘いを私の転勤で実現出来ず非常に残念に思っております。

こうして綴っていきますと先生との思い出は枚挙に遑がない程出てきますが、学内ばかりでなく石油技術協会或いは製油学会・・・etcでも広くご活躍され、学問的にも多大な貢献をされて来られた山崎先生に、心から「ご苦労さまでした」と感謝したいと思います。

これからも益々ご健康でお過ごしになり、後進へのご助言も引き続き賜りたいと思っておりますので、今後とも末永くよろしくお願ひしたいと思います。本当に有り難うございました。

（昭和43年卒 帝国石油）

（1968）

先生の気さくで飾らない人柄に触れて

大野 清

思い起こせば私が早稲田の門を叩いて、初めて先生にお会いしてから早四半世紀の年月が流れました。ここに40有余年の長きに亘る大学での研究・教育生活を無事終えられ、新たな人生を踏み出されるのに当たり、心からお祝いを申し上げるとともに、これまでのご

研鑽とご尽力に対し深く敬意を表したいと思います。

今から25年前の大学は、学生運動華々しき頃で、当理工学部においても入学してまもなくバリスト（バリケード封鎖による強制的学校閉鎖）に入り、授業は翌年まで行われませ

んでした。最終的には機動隊の導入によりバリリストが解除されたと記憶しています。以後70年安保闘争を契機に学生運動は徐々に鎮静化し、その後赤軍派等による過激な行動は続いたものの、今では構内に建看板が立ち並ぶ事も希になってしまい、一抹の寂しさと時代の移り変わりを感じずにはられません。

さて、先生との思い出について少し触れますと、先の学生運動がようやく落ち着きを見せ始めた頃私が3年生の春休みだったと思います。先生は教育活動の一貫として学生を引率して現場見学を行うのを恒例にされており、この時は新潟県の中条油田（ガス田）を見に行くという事で、車3台に各々分乗して（うち1台は先生自らの運転でした）東京を朝早く立ちました。

当時は当然のことながら高速道路もなく、一般国道を道に迷いながらもひた走りに走って上越の山々を越え、新潟県に入ったところでとっぴり日が暮れてしまいこの日の宿探しとなりました。暗い夜道をわずかな灯りを求めて、とある町（村であったかもしれない）外れの一軒屋の民宿をみつけ、とにかく泊まれるのかどうかの確認をとって宿に入りました。夜も遅く急な飛び込み客にはとても食事の支度は無理と思いましたが、親切な宿のおかみさんのご厚意により何かと暖かい夕食にありつき、無事布団の中に潜り込む事ができました。

翌日は朝早く起き、朝風呂（小さな一軒屋の宿でしたが温泉でお風呂も随分と大きかった）と洒落込んだところ、たまたま先生も

入ってこられ、ここで初めて先生との師弟間の交わりと相成りました。先生の若き少年時代の多感な『物語り』…先生の風貌からはちょっと想像し難いのですが幼少の頃は剣道、水泳（古式泳法？）を嗜まれていたとの事、またかなり腕白な少年であったとの事等々をひとしきりお伺いした後（かれこれ小1時間も経っていたらどうか）、話題が詩吟の話に移り、先生が興味をお持ちだということが分かりました。当時私も早稲田の「稲吟会」（詩吟のサークル）にありました関係上意気投合し、静かな山間の白き湯煙りの立ち込める温泉に漬かりながら、共に五言絶句、七言律詩の漢詩を声高らかに吟った事を昨日の様に覚えております。先生の気さくで飾らない人柄に触れたようで、楽しい見学会の思い出として今なお心に印象深く残っています。

以来、先生とは本当に裸のお付き合いをさせて頂き、今日に至って降ります。途中、学位取得に当たっては、一方ならぬお世話を賜ったのを始め、特に不肖私の結婚式の折には晩酌の労をお取り頂き、改めてこの場をお借りして厚く御礼を申し上げる次第です。

この四月からは新設の理工学総合研究所においてエネルギー関連の新しいテーマの研究に取り組まれると聞いておりますが、お身体に十分気を付けられ、持ち前の進取の精神で早稲田大学のため、日本の為ご健闘されることをお祈りいたしまして、筆を置くこととします。

（昭和48年卒、鹿島建設）

最終講義を聴講して

岡津弘明

何も偉そうなことを言えた義理ではないが、講義に遅刻するのは私の主義ではない。昼休みに入ってまで延長している会議に見切りを

つけて、時計をにらみながら同僚の後輩N君とオフィスを飛び出した。この一週間以上、原稿を起こすのに、山崎研での3年間を含む

大学時代へと、頭をタイムマシンに乗せている。研究室での生活は当時の私にとって生活の全てだったかもしれない。それ以降も仕事上でも山崎先生のお世話になってきたし、技術協会を始めとしてお話する機会も多い。思い出も多過ぎると、連日の酒で酔ったままになっている脳の回線が混線している。

幕張から大学に向かうのに1時間以上かかった。昼食？いや時間が足りない。大学は卒業後も度々足を運んできたので、環境の変化には対応しているはずだが、最終講義かと思うと緊張する。“通用門でなく正門から入ろう！”。不惑を直前にした人間は、構内の若い学生の多さに惑わされる。教室はもう満員に近い。後ろの席は、さながら同窓会である。同期のY君が言う“まだ時々大学の夢を見るんだ”。

講義が始まる。大学院で先生の講義を受けてから15年近く経つ。グレーのスーツとベストの先生の姿は、昔と変わらない。声は若く良く通る。語りはマイルドだが情熱を感じるいつもの山崎節。学部3年時の試験を終え、“山崎研はきびしいぞ”と言う学生達の噂を耳に、仲間とともに研究室に押しかけ、先生に話を伺ったときの語りと全く同じ、そのときに感じた視線のやさしさも変わらない。

講義の中で山崎先生が挙げられた幾つかのポイントは、私の在学中から先生が、一貫して繰り返されてきたことである。即ち大学の

使命としての研究の先導、教育としての学問の体系化、そしてなにより常に本物の事象と対面する姿勢、現場の重要性。現在、私も研究開発の末端に身を置くものとして、これらの重要性を再度教えられる感を受ける。興味深かったことは、鉱山学科から資源工学科への転換時の話である。ブレイクスルーという言葉は石油回収技術においては、さほど良い意味とはいえないが、その意味でなく、先生は、この話、また石炭から石油の研究への移行、更に多くの留学生の受け入れや、中国の油田との研究を通じての研究室の国際化促進に代表されるように、常に現状の事象に対面され、ブレイクスルーされてこられたのだろう。

講義を聴き終えて、月並みながら“ご苦労さまでした、そして有難うございました。”と心から思う。しかし先生は、また新しいブレイクスルーを目指されるのだろう。講義の締めめに先生が言われた“Boys be ambitious!” まだまだ先生は元気で若い。

そして蛇足だけれど、講義の後のパーティーの席上で在原先生が、私の職場の上司から山崎先生への祝電を披露されたとき、山崎先生は、いつもの笑顔を更に崩され、また照れくさそうに、周りの諸先輩方にビールをついでおられた。本当にシャイなんだから！

(昭和53年卒、石油公団)

1978

山崎豊彦研究室の思い出

塩澤有史

大学3年夏の選択単位「現場実習」で、南阿賀油田を選んだのが、石油開発業界に足を染めるきっかけでした。この現場実習で石油開発に魅了されて、翌年春、山崎豊彦研究室に加わりました。当時の山崎先生は、往年の厳しさをまだ残しており、小生は公私にわた

りたびたび叱咤されました。小生の同期は、坊ちゃんタイプの橋本さん、写真好きの山田さん、書生をしていた百武さん、吐いてでも酒を飲む川野さん、おっとりタイプの太田さん、迫力のある久米さんの7人で、大学院生として、ひげもじゃの岡津さん、鋭い目つき

の栗原さん、酒飲みの荒金さんが在籍していました。当時は三菱化成と共同研究を行っており、三菱化成から麻雀好きの山川さんが、ほぼ毎日研究（および麻雀）にきていました。

卒業後も修士課程に進学するため、山崎研究室にお世話になりました。新たに石井さん、石上さんが山崎研メンバーになり、研究室にテニスブームがきました。また口が達者な小岩さん、ひょうひょうとした平岩さんなどが所属し、賑やかな研究室でした。新宿南口のげて物をたべさせる飲み屋に、山崎先生を囲んでしばしば出かけました。

1981年秋には、プロボクサーになった4年生の益田さんの試合を、山崎先生を先頭に研究室全員で、後楽園ホールに応援に行きました。山崎先生は、皆のなかでもっとも興奮して、大きなアクションで熱い声援を送っていました。この年は、山崎先生が学年担任をしていたせいで、4年生が9人も在籍し、資源工学科で最大派閥を形成していました。

さて時は過ぎて修士論文提出の日、小生と4年生の岩井さん、飯田さんは2晩徹夜のかいがあり、明け方には卒論が完成し、あとは小生の修論の表題、ページ付けを残すだけになっていました。ところが早朝現われた4年生の森さん横尾さん組は、まだ図表は完成しておらず、本文を書いている段階でした。さらにその後現われた池田さんは、大切な図を

紛失して、パニック状態になっていました。そこで、冷やかし半分に研究室に現われたM1の溝上さん、正田さん含めて、皆で彼女達の図面作りを手伝い、なんとか期限時刻（午前10時）までに、全員の卒論を完成、提出しました。ところが小生の修論が、締め切り時刻（正午）に間に合いそうもありません。当時、修論提出は担当教授宛でしたので、4年生の内藤さんと中村さんが、山崎先生を2～3時間研究室外に連れ出し、その間に皆の協力で、必死に修論を仕上げました。そしてなにくわぬ顔で先生の机上で提出しておいたので、無事修士号を頂けました。

以上、小生が山崎研究室に所属していた期間のエピソードを、時系列に羅列しました。本稿では、当時のメンバーを、一部しか紹介できませんでした。山崎研究室所属学生は、卒業後、石油開発業界に多数就職し、仕事でも密接な関係を保っています。これは山崎先生の御指導、御尽力に負うところがおおく、深く感謝しています。現在、オーストラリアに居住し、石油開発に従事していますが、山崎先生からしばしば励ましの御言葉を頂き、志を新たに奮闘しています。最後になりましたが、山崎豊彦先生の今後のご健康と、石油工学研究室の発展を、遠く豪州から心より御祈りしています。

（昭和53年 MIM石油開発PT Y）

1978

石油開発に思う

影山 隆

山崎豊彦先生の最終講義に出席する為、卒業以来十年振りに理工学部を訪れた。キャンパスは相変わらず学生たちで賑わっており、新しい校舎の為に少し狭くなった気がした。教室に入ると懐かしい顔に出会い、学生時代の記憶が甦ってくる。暫くして先生の講義が静かに始まった。ユーモアを交えた先生独特

の口調に引き込まれ、いつの間にか講義が終了した。長い学究生活を振り返りながら自分の歩いてきた道を淡々と話される先生に、改めて尊敬と感謝の念を抱かずにはいられなかった。又、多くの同窓の製油開発に従事され日本国内のみならず海外に於いても活躍されており、講義の中で触れられた石油技術

者の養成・排出に対する先生の功績は計り知れないものと感じられた。

私が石油工学研究室に進んだのも、先輩から聞いた石油開発というスケールの大きい仕事に魅力を感じたからであった。又、海外で働くチャンスが大きいのも魅力であった。当時研究室には同期が8名おり、全員が石油開発関係に就職し、その殆どが海外勤務を経験している。最近1人を除いて日本に舞い戻り、何年か振りに同期会が開けるかと楽しみにしている。

先生との思い出の中で印象深いのは、カナダでお会いしたことである。観光地で有名なバンフでカナダの石油学会が開催され、先生と一緒に出席させた頂いた。当時オイルサンド開発の研究の為にペトロカナダ社に出向しており、冬期オリンピック開催地のカルガリーより家族とともに数日間一緒に過ごさせて頂いた。先生も奥様と一緒に来られており、ロッキーの大自然を楽しんでおられた様でした。先生は奥様に対してとても優しく、手を取り合って仲良く歩かれていたのがとても印

象的でした。先生のお人柄を改めて感じさせられた一時でありました。

学生時代に先生から受けた研究指導の中で、最近漸く理解出来てきたと思うことがあります。それは、一つ一つのデータを丹念に積み重ね、生じた現象を想像し、理論と組み合わせ、真実を追及していく姿勢です。仕事の中でも得られるデータは限られ、四苦八苦しながら油層挙動を解析していく訳ですが、そんな時に先生の教えである「データを良く見て考えなさい」という言葉を思い出します。実際に研究を進めていく中で多くの仮説を立て結論を導き、それが実際の挙動と一致した時は踊り上がる程嬉しくなります。今後とも推理小説をひも解く様に苦しみながら楽しみたいと思います。

最後になりましたが、同期を代表して一言。「山崎先生、本当に長い間お疲れさまでした。又、今後とも色々ご指導ください。いつまでもお元気で。」

(昭和59年卒、石油資源開発)

1984

訃報

遠藤源助氏(元非常勤講師)は、1994年2月7日、突然逝去されました。享年71歳でした。故人は1942年(昭和17年)、早稲田大学技手として奉職以来、理工学部採鉱冶金学科、専門部工科鉱山地質科をはじめ鉱山学科、資源工学科の測量学、探査工学などの実験・実習、及び講義を担当され、物理探鉱技術会の重鎮として活躍された事は、改めて申し上げるまでもないと思います。

1981年、理工学部共通実験室第四課長にご就任以来、理工学部副事務長(1984年)教務部調査役(副部長待遇、1986年)などの要職を経て、1987年5月31日ご退任(停年)まで、教育・研究を通じての貢献、就中資源工学分野の発展に寄与されたご功績の大きさを思うとき、まさに痛恨の極み、といわざるを得ません。心よりご冥福をお祈りする次第であります。

なおご遺族・美津江様を通じて、本年3月、多額の指定寄付を頂戴いたしました。ここに改めて厚くお礼申し上げますと共に、その有効な用途につき、教室及び資源工学会々員諸氏にお図りする次第であります。

(岩崎 記)

資源工学科の動き

1993年度

1. 日誌

- 4月1日(木)入学式(全学)、昇任 助教授 山崎淳司、助手新任 大木達也 土佐谷優子
- 4月3日(土)始業式 資源工学科入学者62名(内女子5名、石神井高等学院推薦3名、本庄高等学院推薦3名、早稲田実業推薦2名、早稲田高校推薦1名、一般高校推薦9名)新入生担任は在原典男教授
- 4月28日(水)資源工学会総会 大隅ガーデンハウスにて開催 参加者140名
- 5月22日(土)、23日(日)新入生オリエンテーション 追分セミナーハウスにて開催
- 6月11日(金)吉澤奨学金授与式 第4回奨学生として以下の2名に授与 修士1年 前川健太郎、修士2年 鈴木秀夫
- 6月18日(金)1994年度修士課程推薦入学者決定30名(内教育学部11名)
- 9月8日(水)大学院修士課程入学試験
- 9月24日(金)同上合格者発表 資源工学分野17名合格(内外国人3名)
- 10月23日(土)一般高校推薦入学面接試験 推薦者数9名(内女子1名)の合格を承認、また、早稲田実業3名、早稲田高校1名の推薦者の合格も承認
- 11月1日(月)～3日(水)理工展 資源展のテーマは「鉱物の魔力」であり、砂金採りと鉱物研磨を行った
- 12月17日(金)現場実習報告会 8組14名の報告があった。
- 1月13日(木)新年会 非常勤講師の先生方をご招待して四谷のスクワール麴町にて開催 吉川恵章先生(元三井金属)の定年ご退職による慰労会を兼ねる
- 1月14日(金)山崎豊彦先生の最終講義が52号館304号室にて行なわれる
- 2月12日(土)14日(月)卒業論文審査会
- 2月16日(水)17日(木)修士論文審査会
- 2月19日(土)理工学部入学試験
- 3月25日(金)学部卒業式、大学院修了式

2. 就職・進路

学部卒業生: 78名

(内女子2名、外国人3名)

大学院進学者: 28名(早大)

学士編入希望者: 3名

鉱業関係: 三菱マテリアル、小野田セメント、日本セメント

石油・ガス関係: モービル石油、帝国石油、ゼネラル石油、エッソ石油、ジャ

パンエナジー、三井石油、昭和
シェル石油、アラビア石油、石油
資源開発、関東天然瓦斯開発、広
島ガス

科学・セラミックス関係：吉野石膏、松田産業
機械・エンジニアリング関係：キャノン、日
産ディーゼル工業、東芝エレベ
ータエンジニアリング、キャタピラ
ー三菱、東洋エンジニアリング、
日本エアテック、新菱冷熱工業、
千代田化工、中電技術コンサルタ
ント

電気・電力関係：松下電器産業、東芝、富士
通、日本電気

土木・建設関係：佐藤工業、鹿島建設、間組、
浦安工業、ドリコ

情報・ソフトウェア関係：CSK、日本オラ
クル、テレビ愛知

商社関係：三井物産、三菱商事、岩谷産業

運輸関係：日本通運

金融関係：三菱銀行、日本生命、安田火災海
上保険、日本火災海上保険

修士修了者：22名（内外国人3名）

博士後期課程進学者：2名

（早大1名、東工大1名）

石油・ガス・エネルギー関係：昭和シェル石
油、モービル石油、日本オイルエ
ンジニアリング、東京ガス、新エ
ネルギー産業技術総合開発機構

化学・セラミックス関係：東芝セラミックス、
東洋陶器、東洋ガラス、ニッポン
リーバB.V.

金属関係：新日本製鉄、川崎製鉄

機械・エンジニアリング関係：日揮

電気・電力関係：東芝、日本電気

土木・建設関係：大林組、日本道路公団

情報・ソフトウェア関係：博報堂、三菱総合
研究所

未定：1名（帰国）

3. 博士（工学）学位取得者

課程によるもの

上原元樹：Study on 2:1 layer sil-
icate intercalated with
lead compounds

大木達也：化学的クリーニング法に
よる石炭の高度脱灰・脱
硫

加納誠介：Crystal chemistry of
biological apatite and
hydroxyapatite micro-
crystal

土佐谷優子：石綿を含む繊維状物質の
定量に関する研究

村田 克：本質安全防爆型粉じん計
の開発と坑内作業環境測
定への応用に関する研究

Susan A. Roces：The study on in-situ
recovery of hydrocarbon
resources

課程によらないもの

田崎義行：関東推積盆地に賦存する
水溶性天然ガスの開発に
関する油層工学的研究

西川 豊：石炭灰の輸送および軟泥
の浚渫輸送システムの開発

4. 専任教職員の構成

山崎豊彦先生の定年ご退職および村田克氏の助手嘱任、土佐谷優子氏の助手解任（ニチアスに就職）のため、1994年度の教職員構成は以下ようになります。

教授 在原 典男 石油工学研究室
岩崎 孝 開発・環境工学研究室
名古屋俊士 環境安全工学研究室
野口 康二 探査工学研究室
橋本 文作 応用力学研究室
原田 種臣 原料工学研究室
助教授 内田 悦生 資源科学研究室
大和田秀二 原料工学研究室
山崎 淳司 資源科学研究室

助手 大木 達也 原料工学研究室
村田 克 開発・環境工学研究室
技術職員 三浦 仁 資源工学科実験室
事務職員 吉田喜代子 資源工学科連絡事務室

学科主任及び学年担任

学年主任 岩崎 孝
4年担任 内田 悦生(就職担当)
3年担任 山崎 淳司
2年担任 在原 典男
1年担任 野口 康二

編集後記

★受験者人口の減少と平成不況の影響により1994年度の理工学部受験者数は、昨年に引き続き1割減、資源工学科に至っては3割減となりましたが、幸いなことに資源工学科は合格最低点においては中位を保つことができました。なお、今年度の入学者数は推薦入学者19名を含め65名となりました。なんとその内10名が女性です。

★この3月31日をもって山崎豊彦先生が定年退職となられ、資源工学科教員の若返りがさらに進み、平均年齢が52歳となりました。あと数年間この傾向が続きます。

★資源工学科教員で唯一の独身者であった山崎淳司先生がこの4月10日にめでたくご結婚されました。やれやれ！お相手は教育学部地学教室の堤貞夫先生のご紹介で、堤先生の御自宅で極近隣に住まわれているお嬢さまです。これでやっとダイエットできるかな？

★新カリキュラムになって初めての学生がこの3月に卒業しました。卒業に必要な単位数は従来の146単位から130単位へと減少しましたが、資源工学科では卒論着手への条件を厳しくし、俗に言う理工3楽からの脱却を図りました。さてその結果は如何に？

(E. U.)

〒169 東京都新宿区大久保3-4-1
早稲田資源工学会 早稲田大学理工学部資源工学科内 電話：03-3203-4141 内線73-2137
振替番号：東京1-13534